宗像

第四十五期王位戦 第四局
宗像大社勅使館で開催
羽生王座、谷川王位を破り王手をかける

『最初の一手』 左から、神島宮司、土山西日本新聞社事業局長、加藤九段、吉武観光協会長、原田市長

谷川浩司王位（四十二歳）に羽生善治王座（三十三歳）が挑戦している将棋の第四十五期王位戦七番勝負の第四局（主催＝日本将棋連盟・西日本新聞社、共催＝宗像ユリックス・宗像観光協会、後援＝宗像市・宗像大社他）が、八月二十五・二十六の両日当大社「勅使館」で開催された。

この王位戦は、平成十四年九連覇中の羽生王座が谷川王位に十連覇を阻止され、以来谷川王位が二連覇（四十二～四十四期）している。三年連続五度目となった黄金カード。

二十四日
対局場検分・正式参拝・前夜祭

午後三時、先ず谷川王位が勅使館に到着、十五分程遅れて羽生王座も到着し、対局場となる「勅使の間」、両棋士の控室「応接室（谷川王位）」「随員の間（羽生王座）」を、両者がチェックする『対局場検分』が行われた。

対局場（勅使の間）には、『敬神崇祖』の軸が、谷川王位の控室には「吉村忠夫先生」の『伽具夜比売』の軸を、羽生王座の控室には「仙涯和尚」の『蛙』の軸がかけられ、各室に当大社華道講師小方百枝先生により池坊の生花が生

対局場となった『勅使の間』、木製の『藤棚』が組まれ3台のカメラで中継された

10月祭事暦

秋季大祭(田島放生会)

○1日 海上神幸(みあれ祭)
9:30 大島港出港
10:30 神湊港入港
11:40 一日祭(入御祭)
(主基地方風俗舞 奉納)

○2日
8:00 流鏑馬神事
於＝神門前 参道
11:00 二日祭(狩舞奉奏)

○3日
11:00 三日祭(浦安舞奉奏)
引き続き 高宮 秋季大祭
〃 第二宮・第三宮秋季大
〃 宗像護国神社 秋季大
14:00 南坊流献茶祭
於＝辺津宮 本殿

○15日 月次祭
10:00 高宮祭
〃 第二宮・第三宮祭
引き続き 宗像護国神社 巡拝
11:00 総社祭(豊栄舞奉奏)

○17日 11:00
表千家家元御奉仕
献茶祭

○28日 11:00
沖・中両宮秋季大祭
於＝大島・中津宮

原滴

在来種の生息域を外来種の動植物が破壊する環境破壊が起きている。

一九八四年石川県の七ツ島大島では十二ヘクタールの島に住民がつがいのカイウサギを二組放したところ、瞬く間に三〇〇匹に増殖、島の草木は食い荒らされ土壌が流出し、今では島を住処とする天然記念物のオオミズナギドリの巣穴が次々と壊され、銃を使った駆除が行われていると聞いた。

このような島などでは植物の食物連鎖、動物の生態系の均衡は自然と保たれていたにちがいない。しかし昨今のペットブームにより人間の無責任なモラルの結果このような事態が起きた。一部の動物愛好家より、うさぎを殺すのはかわいそうだ、残酷だとの指摘も出ている。しかし人間がこのうさぎ（外来種）を駆除しなければもっとこの島の生態系は崩れていくにちがいない。

人間がこの島にそもそも、うさぎを放たなければこのうさぎたちを駆除しなくて済んだはずである。

外来種を駆除し在来種の生息域を確保するのもそれもまた一つの自然保護・動物愛護につながる。

人類の手によって崩した生態系は人類の手により元に戻す様努力する事が責務である。（H・N）

神具・装束 結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
井筒 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

けられた。

検分の後、翌日からの対局に使用される将棋盤に両棋士が揮毫、当大社神島宮司と懇談の後、正式参拝し健闘を誓い合った。

その後、両氏は宿泊、前夜祭の会場となる「玄海ロイヤルホテル」に入り、午後六時から両棋士を歓迎する『前夜祭』が、一般の将棋ファンも参加し開催され、原田宗像市長、清水西日本新聞社会長らの挨拶の後、神島宮司の乾杯で宴が始まった。

両氏には記念品として、吉武宗像観光協会長から、当大社神宝館で収蔵する国の重要文化財を博多人形師が複製した『宗像狛犬』が贈られた。

また、対局の立会いをする深浦康市八段（長崎県佐世保市出身、現在は東京在住）は挨拶の中で「宗像大社は私がプロ棋士となることを導いてくれた思い出の地。この宗像大社で開催されていた『宗像王位戦（昭和五十二年～平成十一年まで開催された九州を代表するアマチュアの将棋大会）』に、小学校六年生で長崎から参加し、その時石田先生から指導を受けたことが、プロになったきっかけ」と感慨深げに話されていた。

正式参拝後、左より加藤一二三九段（正立会人）、羽生善治王座、谷川浩司王位、深浦康市八段（副立会人）、神島宮司

二十五日

対局初日

定刻の午前九時、加藤九段・深浦八段・西日本新聞社土山事業局長・原田宗像市長・吉武宗像観光協会長・神島宮司の立会いで『最初の一手』が行われ、互いの持ち時間をそれぞれ八時間として開始された。

本殿で玉串を捧げる両棋士

祓舎内でお祓いを受ける両棋士

午前中は変化無く、昼食後谷川王位が急戦を仕掛け、局面は一気に緊張感を高め午後六時、先手の谷川王位が三十一手目を封じて初日を終えた。

尚、『封じ手』は当大社金庫で保管。

両棋士に記念品を渡す吉武会長（前夜祭にて）

両棋士に手渡された記念品（博多人形師による宗像狛犬）

二十六日

対局二日目

午前九時、立会人の加藤九段が昨日の谷川王位の『封じ手』を開き、「24歩」を示して二日目の戦いが始まった。

宮司の話に耳を傾ける羽生王座（前夜祭にて）

市長と懇談する谷川王座

「2四歩」は攻めを継続する手で、谷川王位の攻めに羽生王座も真っ向から応じ、早い展開で両者一進一退しながら、大激戦となった。

午後六時五十八分、百二手までで後手番の羽生王座が勝利を収め、対戦成績を三勝一敗とし、三期ぶりの復位に王手をかけた。持ち時間各八時間のうち残り時間は谷川一分、羽生九分であった。

尚、両日とも宗像ユリックスで、テレビ中継、大盤解説、クイズなどが行われ、約四〇〇人の将棋ファンが九州各地から詰め掛けた。

当大社での思い出を語る深浦八段（前夜祭にて）

加藤正立会人が『封じ手』を開き対局2日目に入る

対局は両者攻めの応酬であった

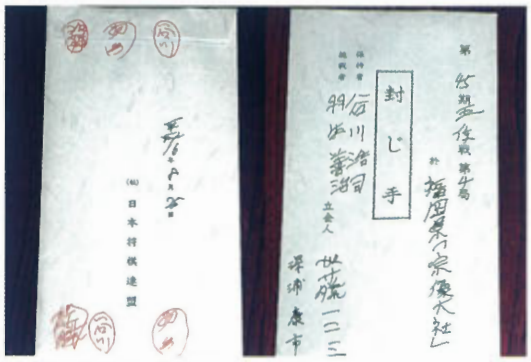
局	担当新聞社	開催県	開催都市	会　場	対局日	勝者
1	徳島新聞	徳島県	徳　島	渭　水　苑	7/16・17	谷川
2	北海道新聞	北海道	紋　別	ホテルオホーツクパレス	7/27・28	羽生
3	中日新聞	三重県	阿　児	賢島　宝生苑	8/4・5	羽生
4	西日本新聞	福岡県	宗　像	宗像大社	8/25・26	羽生
5	神戸新聞	兵庫県	神　戸	中の坊瑞苑	9/7・8	羽生

この王位戦だが、別表の通り、その後行われた神戸での対局の結果、羽生氏が二年ぶりに王位に返り咲いた。両棋士の今後益々の御活躍を心より御祈念申し上げます。

今回、当大社で開催されたのは『王位戦』。三社連合といういくつかの地方新聞社が共同で運営をし、今回は西日本新聞社の主催でした。

最も権威のあるタイトルとされるのが『名人戦（毎日新聞）』で、他に『竜王戦（読売新聞）』『棋聖戦（産経新聞）』『王座戦（日本経済新聞社）』『棋王戦（共同通信社）』『王将戦（スポニチ）』があります。

以前、「羽生七冠」という言葉が飛び交い、羽生氏が一躍時の人となりましたが、この七つのタイトルを全て同じ年度にとったことを指します。宗像対局の前夜祭で、加藤一二三九段（福岡県八女市出身）は「羽生さんの七冠というのは奇跡に近い。あのようなことは今後二度と起こりえない」と話されていました。野球の本塁打・打率・打点のタイトルを全て取った打者を『三冠王』といいますが、それどころではないようです。将棋の七冠は後にも先にも、平成七年度の羽生氏だけということです。



当大社の金庫で一晩保管した『封じ手』

対局を振り返る『感想戦』であるが、険しい表情の羽生王座

第二回出光興産(株)中堅社社員研修 宗像大社研修 開催

今年の二月に続き、九月三～五日までの二泊三日で、第二回出光興産(株)中堅社員研修の宗像大社研修が行われた。

三十年以上に亘り六十五期まで続けられた『店主室教育研修』を継承し、店主（創業者＝出光佐三氏）縁りの宗像の地で、今後の同社を背負う中堅社員を対象に実施された。

三十五～四十歳の研修生二十九人と、本社人事部教育課の木部教育課長以下二人の計三十二人が当大社で研修を行った。

九月三日（一日目）

一三：〇〇 残暑厳しい中、全国各地から研修生が当大社清明殿に参集し受付。
一三：四五 開始奉告祭に参列後、研修日程に入る。
一四：〇〇 神島宮司開講挨拶
一四：二〇 関人事部次長講話
一五：〇〇 出光人事部担当者行程説明
一五：三〇 白衣・白袴（はっこ）の着装、潔斎（けっさい）
一六：四五 神社祭式作法（朝拝演習）
一九：四五 鎮魂（ちんこん）
二〇：四五 入浴・就寝

研修生にはこの二泊三日の研修期間を神社で過ごしていただく、よってまず白衣・白袴の着装・畳み方から入る。

初めて着装する白衣・白袴、作法に戸惑いながらも、何とか潔斎を終え、朝拝で『大祓詞』を奏上出来るところまで演習した。

一日の締め括りは高宮斎場での『鎮魂』。研修生も勤務先の先輩から耳にしており、この研修の山場である。浄闇の参道を懐中電灯の灯りを頼りに、百八段の石段を進む。玉砂利に正座し、『大祓詞』を奏上する。その後、神職の「鎮魂はじめ」の掛け声で鎮魂に入る。約四十分間行われ「鎮魂やめ」の声で終了。

その後、各班毎に順番で潔斎。清明殿から洗面用具を風呂敷に包み、五・六人で潔斎場に向かう様は学生の合宿のようにも見え、研修らしい光景であった。

九月四日（二日目）

六：〇〇 起床・洗面・潔斎
七：〇〇 朝拝準備、境内清掃
七：三〇 朝拝
八：四〇 神宝館見学
九：五〇 記念撮影
一〇：〇〇 小柳陽太郎先生講話
一三：三〇 筑前大島渡島
中津宮・沖津宮遥拝所・御嶽宮参拝
一八：四五 御由緒説明
一九：四五 鎮魂

研修生のうち、当大社に来社するのはほぼ全員が初めて。神宝館では、約一〇〇〇点の国宝を含む、十二万点の国宝・重要文化財通して、我国の草創期における宗像大神の役割と歴史を感じていただいた。

小柳先生の講演後、昼食を挟んで午後からは、白衣白袴からスーツに着替え、大島へ渡島。中津宮・沖津宮遥拝所・御嶽宮（みたけ）を参拝。天候が悪く靄（もや）がかかっており、残念ながら遥拝所・御嶽宮（山頂）とも沖ノ島を拝すること出来なかった。

帰社後、夕食をとり、当大社の御由緒・神社神道についての講義を受けていただた。昨日、今日と見て聞いて体験していただいたものを、裏付けていただいた。

研修開始奉告祭

九月五日（三日目）

六：〇〇 起床・洗面・潔斎
七：〇〇 朝拝準備・境内清掃
七：三〇 朝拝（研修終了奉告祭）
九：三〇 宗像大社 出発
店主生家見学
創業の地門司見学
千葉・平川寮へ移動

日供祭並びに研修修了奉告祭に参列。朝食後、着替え、荷物整理をし午前九時三〇分社務所前に整列。神島宮司以下神職・巫女・管理員・調理員・事務員ら全職員で見送りを受け、次の研修地へ出発された。

その後は、宗像市赤間の店主（創業者＝出光佐三翁）墓参、創業の地門司を見学し上京。千葉の平川寮で

午前7:30～の朝拝式

二十日まで十日間の研修に入るとのことであった。

研修生の方々は、中堅社員として忙しい日々を過ごされ、この人が抜けたら仕事が回らないという方ばかりだと思う。研修開始直後の自己紹介挨拶で、「忙しい中を調整し参加させてくれた職場の皆に感謝し、稔りある研修にしたい」と言われた方がいた。中にはこれ程社を離れるのは入社以来初めてという方が大勢いたし、実際直前で不参加の方もいた。

神社で寝泊りする。白衣・白袴を着装する。大祓詞、鎮魂、諸々の体験が初めてであったと思う。この宗像大社での研修を、生かすか生かさないかは自分次第である。

二泊三日という短期間であったが、この宗像大社で過ごした時間が、研修生の日々の生活で、一人一人の長い目で見た今後の人生でお役立つことを切に願う。

研修生皆様の今後益々の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

大島・中津宮を正式参拝

慣れぬ正座は翌日もつらいです

残念ながら沖ノ島は見えませんでした（御嶽山々頂にて）

第二回 家族木工教室

八月二十八日第二回となる家族木工教室が十六家族、四十五名の参加者を迎え境内で開催された。

この教室は、当大社の様々な木造建築物の修・造営に携わった、宮大工の棟梁が中心となり、職人十七名の全面的な御協力・御奉仕で開催となった。

意識せずとも『物』に溢れ、自らの手で何かを『創る』という機会が少なくなった現在、日本の豊な自然・風土の中から生まれた『木の文化』に触れ、夏休みの思い出として家族で一つのものを作ってもらおうという趣旨で行なわれた。

当日は心配された天候もなんとかもちこたえ、午前九時には宗像市郡内はもとより県内各地から参加家族が集合し、本殿で安全祈願祭、棟梁の作業説明後、一斉に制作に取り掛かった。

本年の木工課題は『折りたたみ式踏み台』である。参加の家族、子供達は慣れない手つきでノコを挽き、釘を打ち悪戦苦闘しつつも時には、プロの職人さんの技術に驚きながら、時間を忘れ作業は進んだ。

また、猛暑の中、JA宗像田島支店・宗像市消防団第八分団より御協力いただいた「かき氷」は子供達に更なる作業意欲を与え、午後三時にはそれぞれ好みに色づけされた完成品が並んだ。

引き続き、家族リレー式の丸太早切競争が行なわれ、当初に比べ多少慣れた手つきで、賞品付ということもあり歓声の飛び交う競争となった。

そして、午後三時半には全ての日程を終了し、表彰式並び閉会式が行なわれ家族たちは思い出となる作品を抱えお宮を後にした。

（続）海の寄物 188

いしい ただし

漂着物のシンボルといえば椰子（ココヤシ）であろう。古賀の国民文化祭のポスターも二川秀臣氏が版画で、椰子を刻して下さった。

椰子は柳田国男の愛知・伊良湖岬からはじまり、島村藤村の「椰子の実」の詩となり、大中寅二が曲をつけて、今なお国民に愛唱されている。

夏になると、きまって椰子をデザインしたものがあらわれ、夏・海・椰子という構図となっている。日本人は本当に椰子好きである。縄文時代や弥生時代の遺跡から椰子は出てくるし、加工をして容器などに使用されている（漂着した椰子であろう）。長崎県・壱岐原の辻遺跡からは前号でも書いたが椰子笛も出ている。弥生時代の土笛は宗像市光岡長尾遺跡から出ているが、壱岐の椰子笛と形も酷似しているので、どっちが先か分からぬが、椰子好きの私にとっては、椰子の笛が先で、土笛はそれをまねて作られたような気もする。

椰子（ココヤシ）

笛は中国に陶塤（とうけん）があり、その陶塤は椰子にその姿を求められないかと思ったりもする。

さて椰子を加工したものが一〇〇円ショップに出ている。一個一〇五円の容器から、一五〇～三五〇円までで、貯金箱、小物入れ、花立て、置物、灰皿、なんとポセットまである。値札にハングルやメイドインチャイナの文字があるので、素材をココヤシ最大の生産国フィリピンやインドネシア、中国南部の海南島あたりから安く仕入れて、現地人を使って加工しているのであろう。コプラを採取した後の内果皮（殻）を加工したものだが、とにかく安い。

今迄インドネシアとかの輸入でココヤシ製品は容器でも三〇〇円から五、六〇〇円以上するし、ポセットも六〇〇〇円という値札を見たが、同じものがなんと三五〇円だから驚く。私は椰子が大好きだから百均へ行く。つい数個は買ってくる。「こんなに安くできていたのか」と今迄の日本の輸入業者の暴利には腹立ちさを覚える。

椰子と言えば、国文祭で展示するフタゴヤシがある。双子椰子とか大実椰子といわれるように、世界最大の果実で、ココヤシを二つくっつけたような形をし、それがお尻のように見える。インド洋に浮かぶセイシェル島のみに産するもので、はじめインドの海岸や、航海中に漂っているのが見つかり、海に生えているものと考えられたりもした。そのため海椰子とも呼ばれたこともある。いつの間にかこの椰子に解毒作用もあるといわれて一七世紀のヨーロッパでは法外な値段で取引されたこともある。重さ二五～三〇キロと巨大で実が成熟するのに六年、発芽に三年を要するという。巨大でしかも珍奇な姿をしているので、今でもセイシェル島では高価な値段で取引されている。

宗像では所蔵者が二人あり、その一個を借りて国文祭の展示することにしている。滅多に見る機会がないので話の種に見てもらいたいものである。

博物館実習開催

去る平成十六年八月十六日より二十六日まで（一日休みを含めて実質十日間）当大社神宝館において博物館実習が行われた。

この実習は大学で学芸員資格取得を志し博物館学芸員課程を履修している学生を対象に、当大社文化財管理事務局が毎年同時期に実施しているものである。今年は県内外より男性二名、女性十二名の計十四名が受講した。

実習生は毎朝、朝拝式に参列、神職のお祓いにより気を引き締め講義に向かった。初日の高向権宮司による神道、信仰についての講話を皮切りに、講師の方々による講義（楠本正氏による「絵馬」「海人」、石井忠氏による「漂着物」、松本肇氏による「考古学」、藤川宣重氏による「刀剣手入れ」）や学芸員による講義（河窪学芸員による「歴史学」、重住学芸員による「博物館学」）を受講し、その他拓本実習や資料整理などを体験した。

楠本講師の説明に聞き入る実習生

また宗像市、郡内の文化財施設や史跡を見学し文化財行政にも触れ、あらゆる観点から専門的、実務的知識を学んだ。初めての現場での経験に緊張し戸惑いながらも熱心に取り組む姿は誠に輝かしく微笑ましかった。実習を終えた学生から「学芸員への志が益々強まった」との声を聞けたことは喜ばしい限りである。実習生が近い将来、本実習で習得したことを糧にし、有能な学芸員として活躍する日を迎えることを心より願う。

⑥小品盆栽

①観光協会案内所

⑦千輪咲き

②菊みくじ

⑧大輪

③懸崖

⑨盆栽

④玄海小生徒作品

⑩一文字

⑤古木添木

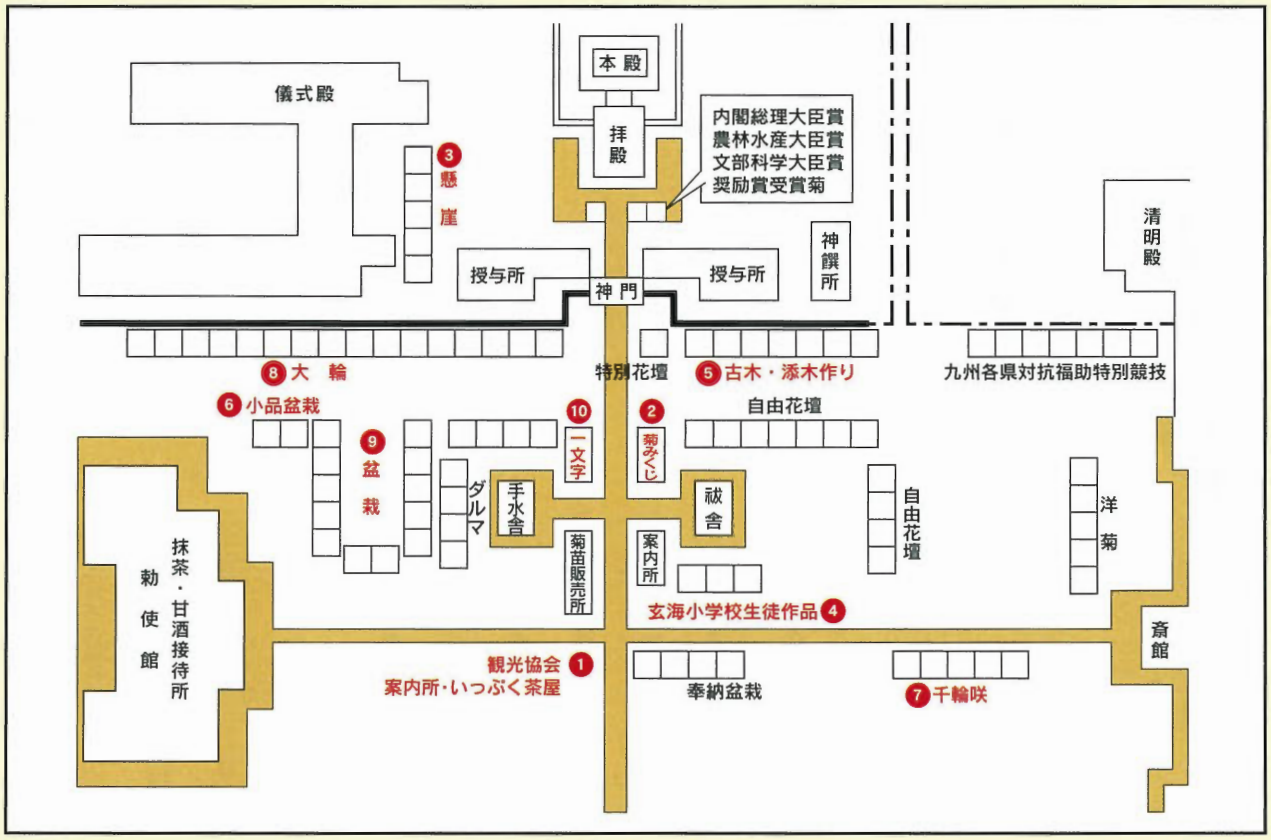
第三十四回
西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三五〇〇鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いっぷく茶屋』なども開かれています。

是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

期　間　10月29日(金)～11月20日(土)
時　間　終日　夜間は(午後6～9時まで)イルミネーションでライトアップしております。
会　場　宗像大社境内
表彰式　11月14日　午前10時～
於＝アクシス玄海
拝観料　無料　**駐車場**　無料



お知らせ

宗像大社神宝館では平成１６年10月30日(土)～11月23日(火)まで「宗像大社刀剣展」を開催致します。
つきましては本展覧会の展示準備、撤去に伴い下記の日程にて休館予定です。
10月28日(木)、29日(金)11月24日(水)、25日(木)
いろいろとご迷惑をおかけしますが御理解の程宜しくお願い申し上げます。

第五一八回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

福　間　　中村　勇

雨来れば秋の野菜の種蒔くと朝より老の身励まし畑打つ

福　間　　香月　照子

丈なして庭に茂れる夏草を気にすることもなくなり久し

鐘　崎　　安永　久子

覚めてまずベッドに屈伸運動し両手両足の自在確かむ

田　熊　　有田　ゆり子

雑巾がけ終へ板の間に寝転べば背の冷え冷えし一人の昼寝

日の里　　神田　一敏

今日夢に出で来し母は悄然と何も言わずに急ぎ帰れり

日の里　　石松　弘次

小石原の絵皿スケッチ大会によわいさて置き挑戦したり

福　間　　井田　有久衣

痛む足引きずりながら行く吾にお元気そうでと声をかけらる

（評）斉藤茂吉が○曉の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるものと詠っている。誰も逃れることの出来ない病老死のなかの老。その老いの身に起る現象を能動的、受動的それぞれの立場で詠って興深いが、皆さんはどの作品に同感されますか。

大　島　　杉田　禮子

盆をつれ来ると言はるる赤とんぼ今日十五日群れて飛び交ふ

田　野　　森　甲子

緑田の中の大樹のさるすべり忽然として花ひらきたり

大　井　　木原　ふさ子

昼近く温り残れる谷の径おはぐろ蜻蛉影のごと飛ぶ

津屋崎　　佐々木　和彦

朝はやくさえずる声は山雀かめざめてすぐに聞こえてくるは

大　島　　越知　治子

夕暮れのいまだ暑さの残る道白粉の花咲きてさやけし

（評）自然は常に新鮮で私達のうたごころを呼び起してくれる。古今集の○秋来ぬと目にはさやかに見えぬども風の音にぞおどろかれぬるのように、季節の移りをいち早く知らせてくれるのは風であり、小動物であり、草花であるが、それらを自分の目や耳でとらえた、これらの作品に一種のなつかしさと安らぎを覚えるのは私だけではないだろう。

朝　野　　藤井　浩子

阪和道下ればすぐに並びゐるハウスいづれも梅の干さるる

東旭ヶ丘　　天野　玲子

山鹿灯籠頭にのせて乙女らが踊る姿に時を忘れぬ

（評）旅は身心をリフレッシュさせてくれる。前者は南高梅の和歌山に足を踏み入れた途端、後者は山麓の灯籠祭の幻想に心はなたれて一種の異次元の世界に遊んでいる。

浮　羽　　向　則正

幼児は眠りしままに口動く乳呑児のころの夢みてゐるか

（評）この幼児は孫だろうか、祖父の孫にそそぐ目がやさしい。

日の里　　大和　美由紀

身をかがめ竪穴住居に降り立てば土間涼しくて匂ひ懐かし

（評）竪穴住居の土のなつかしさは、また縄文時代に回帰する懐かしでもある。

田　野　　森　つるの

餅用の大き石臼前庭の蹲（つくばい）にされ犬が水飲む

（評）大きい石臼はこれからも前庭の景を引きしめると共に、犬猫や小鳥たち、時には蝶や蜻蛉の憩いの場を提供しつづけるのだろう。

牟田尻　　横山　雪子

引きぬきて抜きても芽吹く浜管が戦ぎつつ言ふまた遊ばふよ

王　丸　　小方　玲子

朝の日に向きて芙蓉のあわき紅「一つ咲けり」と夫が指さす

選者詠

湖面より立ちのぼる霧竹群をつつみて杉の木立をつつむ

円形の池に飼はれし錦鯉飼（し）に群がれば水音となる

岩あれば岩に激ちて淵あれば淵に渦巻き谿の川ゆく

宗像大社 歌会 俳句作品集（四九三）

光岡　白土　凌一

バスハイク涼を求めて山の里

東郷　田中　憲象

赤蜻蛉つぶやきながら飴細工

光岡　井上　嘉治

立秋に向日葵項垂（うなだ）れにけり

日の里　花田いつ枝

茅の輪早や長蛇の列のくぐり行く

東郷　宗風社俳句会　吉武　湧泉

次つぎと焦らずすくふ金魚かな

吉田　杏子

人に逢ひ人に別れて月は澄む

三浦美千代

阿蘇山路霧白々と月を消す

田中　雨葉

鵙高音白帆は沖に滑り出す

木原　房子

トマト食ふ瞳の美しき七才児

福間　森　清

落穂食む鳩三方へ脱兎せり

編集後記

沖ノ島にいってきました。勤務中、海上保安庁の方が今月二度目の灯台点検に来島されました▼帰りは夜中の交代で、沖ノ島を出港ししばらくすると、暗い波の合間に点いたり消えたりする大島の灯台が見えました。予想通りの船酔いの中で、それは段々はっきりと光りを放つようになり、限界に近付いていた小生には励ましてくれている様でした。そして、何とかもどさず陸（おか）に着けました▼灯台は必要です。佐藤船長がおっしゃってました。「今は機械が発達して、灯台に頼らなくても船を移動出来るが、自分の目で見ないと本当（真実）かどうか信じることが出来ない」と。少しだけ海のルールを目にすることが出来ました。（M・O）

発行所　宗像大社社務所
宗像会
〒811-3505　福岡県宗像市田島
電　話　0940-62-1311（代）
発行人　伊藤佳和
編集人　大塚宗延
制　作　ジーエータップ
印　刷　ゼネラルアサヒ
定価1年送料共1,000円